

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：24402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720124

研究課題名（和文）元・明両代に登場した類書・字書の系統に関する研究

研究課題名（英文）Study on the Relation Between Encyclopedias and Dictionaries
Published in Yuan Ming Period

研究代表者

大岩本 幸次 (OIWAMOTO KOJI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10336795

研究成果の概要（和文）：本研究では中国古代、特に元明両代に編纂された類書と字書に着目、資料間の内容的関連を調査し、中国古代文化史に関わる問題の一端を解明せんとしたものである。調査の結果、元明両代の資料は、先行する金や南宋といった時代の資料の内容を直接的にはないにせよ脈々と受け継ぎ、編纂当時の言語状況などを取り入れつつ編まれる場合が少なくないことが分かった。また江戸期に編纂された字書類には元明の資料の内容が色濃く反映され、その中にいま失われた資料が引用されているのは貴重である。

研究成果の概要（英文）：In this study, I picked up some encyclopedias and dictionaries published in ancient China, especially in Yuan /Ming period, researched the details and relationships of these dictionaries, tried to find out an answer to the problems concerning cultural history of ancient China. Through this research, I discovered these dictionaries, directly or indirectly, inherited the contents of earlier publications appeared in Jin or Nan-Song period, but in many cases, phonological features were different from earlier materials, changed into the types considered an orthodoxy in each period. Japanese Scholars in Edo period often used these Yuan/Ming type dictionaries in their works, and it's so precious thing that we can see the quoted contents of lost materials in the dictionaries compiled by these Edo scholars.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：類書、字書

1. 研究開始当初の背景

(1) 類書には多岐にわたる情報が盛り込まれ、従来その研究アプローチも様々であ

る。例えば詩の実作と類書との関連に着目した研究は多数を占めるものの一つであり、また、契約文書集が記載される類書に

古代行政の様相をみる研究もある。これまで類書に関わる興味深い事柄が明らかにされてきたが、対象となる資料の数量・種類が膨大なこともあって、調査・考察の余地もなお大きく残されており、いまだ顧みられぬ類書資料も存在する。

(2) 元・明代の資料については、清代の『四庫全書總目提要』に「猥陋・蕪雜」と評価が低いことも影響しているのか、管見の限りでは関連する研究が多くは確認されない。しかし、かような元・明の類書も編纂の当時などは相当に需要を得たとみえ、例えば明代の中・末期に相次いで登場した海篇類と呼ばれる通俗性の濃厚な字書群には、これらの類書からの引用がしばしば掲載され、工具書として確実に一定の影響力を有していたことが推測される。

(3) 類書にはその類書間に明らかな継承関係が認められ、例えば明代の『韻学事類』ほか数種について調べてみると、いずれも元代の“詩賦詞藻系”類書である『詩学集成押韻淵海』の内容を修正・圧縮して成ったことがうかがわれる。資料の性格を知る上で重要なこの系統性は、細かく内容を見ていくことでおそらく他の類書にも見いだされるものと思われる。

2. 研究の目的

(1) 元・明の時代に登場した、主として詩作の補助を目的に編まれた類書を対象に、版本状況や資料構造を調査し、各資料

の編纂過程また資料間の内容的関連を考察する。この作業により、これまで不明も多かった特定の類書群について、特徴や類別などを明らかにすることを企図するものである。

(2) 明代の中・末期に、字書本編の内容が酷似する一群の字書が次々に刊行されたが、現在は海篇類と総称されるこれらの字書を対象に、海篇類の発展が類書との関係の中でどう位置づけられるかという点を考慮に入れつつ、最終的に海篇類全体の系譜を構築することを目指す。

(3) 海篇類の字書本編にある収録字を精査し、各書の音韻的特徴を整理する。海篇類は先行資料の内容を機械的に踏襲するものが多く、ここにいう音韻的特徴も必ずしも編纂当時に行われた言語音の反映としてでないが、海篇類の中には生々しく言語音を反映する種類もあり、その場合は先述の作業と並行して当該海篇類の音韻史研究資料としての位置づけを試み、海篇類字書から知られる明代言語音とはいかなるものかという問題に一応の結論を得る。

3. 研究の方法

(1) 元・明代の類書について版本・書誌学的調査を行う。「詩賦詞藻関係の類書」を基本にしなが、他資料にも目を配り検討範囲は随時に調整する。調査対象リストを整理して後、当該の所蔵機関を訪問して各種版本を調査する。必要な部分については

機関の許可を得て複写を入手し、詳細な検討に役立てる。また、複写機の代用としてデジタルカメラを併用し、所蔵先の許可を得られた場合に資料撮影を行う。この作業に続いて、具体的な検討に入る。検討のポイントとして、資料の基本的構造のほか、例えば官刻・坊刻といった刊行機関の別による版本内容の差異が認められるか否かといった点や、また、各類書が編纂される際に用いられた先行資料との差異等に注意する。最終的に、以上の観点よりする考察をまとめ、元・明代類書の性格や系統について結論を出す。その過程においては、豊富に存在する類書関係図書また中国古代文化関係図書等を活用し、個々の検証の精度を高めるほか、研究全体の深化に役立てる。

(2) 海篇類については以前に実施した調査により、主要版本に関する一応の整理は完了している。今回は欧州での資料調査を実施して前回調査を補完する。また、国内所蔵の海篇類についても、前回は海篇類が主対象でなかったこともあり、大半の資料についていわばサンプル調査を通して概略を把握するに終わったため、今回は更に詳細な検討を行うべく必要箇所を複写を補充したい。その後、具体的検討に入る。海篇類にうかがえる元・明代の類書の様相を考察することに一定の重点を置きつつ、官刻や坊刻といった刊行機関の別による版本内容の差異や、出版者・編者の別による特色等、様々な箇所に注意して考察を進

める。最終的には以上の観点よりする考察をまとめ、海篇類の発展が類書との関係の中でどう位置づけられるかを考慮に入れながら、海篇類の系譜を構築することを目指す。

(3) 海篇類の字書本編の検討に重点を置き作業を進める。これまでの調査で得られた海篇類の相互関係についての知見は、数十種にのぼる海篇類の字書本編を検討する際にも有効に働く部分が多いと推測され、従来の成果と照らし合わせながら、しかしそれに拘泥することなく、音注も含めた字書本編の様相からみた海篇類の継承関係を考察し、更に精密な系譜の構築を目指す。海篇類の中には生々しく言語音を反映すると推測される種類もあり、そうした資料についてはその特色を考察する。中国古代言語学関係図書や言語学関係図書を活用して個々の検証を充実させるほか、中国・清華大学の論文ダウンロードサービス「CNKI」等のオンライン・データベースも積極的に利用する。

4. 研究成果

(1) 明代の末期に登場したと推測される類書資料である『正音郷談雑字』および『群珠六言音義』に着目し、以下二つの作業を並行して行った。

①『正音郷談雑字』については、現時点で存在が確認される数種のテキストを所蔵機関に赴いての複写申請、あるいは影印本

の購入の形で入手し、主としてその校勘作業に従事した。現在その存在が知られるテキストとしては、国立公文書館に所蔵される抄本が二種、早稲田大学図書館に所蔵される抄本が二種、ハーバード大学の燕京図書館に所蔵されるという刊本が一種ある。これらの内容を相互に比較・検討し、全体テキストの確定を行い、また付随して収録されている語彙や、語彙の多くに付けられている音注についても整理を進めた。

②『群珠六言音義』については、現在までのところ国立公文書館に所蔵される刊本以外に同内容のテキストが見つからず、この公文書館本に基づいて序文や歌訣部分の検討を行い、また書の後半に設けられている、同音字をまとめた韻書のような様相を呈する箇所について、その表す言語音体系を窺うため基礎的な整理を行った。

(2) 明代の海篇類字書や海篇類を踏襲した本邦の古辞書について種々のデータを取る作業を行うのに並行して、元代の官僚であった楊桓の編纂した韻書『書学正韻』における韻目、収字配列、反切、等位整理、増字の内容について具体的に調査を行った。従来、『書学正韻』については宋代の『広韻』に依拠して編まれた可能性を指摘する見方や、楊桓の編纂した文字学の著書である『六書統』の内容を韻に従って並べ替えたものとする見方がなされていたが、今回の調査の結果、楊桓は『書学正韻』の編纂に際して、韻目が 206 種類揃っている

宋代の『集韻』を基盤として用い、そこに 160 韻構成の『五音集韻』の元版を参考に字母および等位の表示を加え、反切も『五音集韻』を参照して部分的に変更し、さらに『五音集韻』から『大広益会玉篇』等に由来する字や『五音集韻』編者の創見によって生じた字を取捨選択して組み込む、そういった編纂過程を経た資料であることが分かった。

(3) 個々の海篇類字書について種々のデータを取る作業を行うのに並行して、江戸時代の儒学者である毛利貞齋により元禄四年に成立したとされる字書『増続大広益会玉篇大全』について検討を行った。毛利貞齋の代表作ともみなされているこの資料には、全 105 種の先行資料が引用されると目録に記されているが、実際にはその全てが引用されているわけではなく、また、一つの資料が複数の資料として引かれる、あるいは逆に二種の資料が一つの資料として引用される、といったケースも見受けられた。こうした点は本邦において中国字書をどのように受容したかといった、江戸時代に流通していた小学書の受容状況の一端をうかがう上でも興味深い。また、この『玉篇大全』には海篇類も多く引用されており、その中には現存する種類のもの以外の書名が含まれている。これは海篇類の系譜を考える上でも貴重な資料とみなすことができるため、その引用内容を整理する作業を行った。その他、元代の韻書である『書学正韻』について従来の研究内容に

補正を加え、またこの『書学正韻』に影響を与えた金代の『五音集韻』（一二〇八）に関係を有すると目される資料である『皇極経世解起数訣』「声音韻譜」についての論考を公表した。

（４）明代海篇類字書の調査に関しては、他書中における引用分を考慮する必要が生じたため、研究の進捗に変更を加えざるを得なかったが、海篇類以外の元明両代資料について調査に一定の進展がみられたことを考え合わせると、本研究全体としてみた場合には、おおむね順調に進展しているとみることができる。海篇類字書群については、所在調査・目録作成・初歩的検討の段階であれば個人でも対応が可能な部分も多いが、具体的な内容検討の段階に入ると、その種類が多種にのぼることもあり、個人では網羅的な検討は難しくなってくる。そのため、今後さらに海篇類字書群の検討を進めていくためには、複数の研究者によるグループを組織し、相互の協力体制を整えた上で取り組んでいくことが有効であると思われ、そうした状況も視野に入れて今後より良い研究方法を模索していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

- ① 大岩本幸次、毛利貞齋『増続大広益会玉篇大全』所引の小学書について、東北大学中国語学文学論集、査読無、第16号、2011、93-108

- ② 大岩本幸次、『皇極経世解起数訣』「声音韻譜」について、日本中国学会報、査読有、第63集、2011、63-79
- ③ 大岩本幸次、元代楊桓的《書学正韻》与《五音集韻》、浙江大学中文学術前沿、査読有、第2輯、2011、20-35
- ④ 大岩本幸次、元・楊桓『書学正韻』と『五音集韻』、東北大学中国語学文学論集、査読無、第15号、2010、65-80

〔学会発表〕（計1件）

- ① 大岩本幸次、『皇極経世解起数訣』「声音韻譜」について、日本中国語学会関西支部例会、関西大学千里山キャンパス、2010年7月11日

〔図書〕（計1件）

- ① 大岩本幸次、臨川書店、皇極経世解起数訣「声音韻譜」校異記、2011、190

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大岩本 幸次 (OIWAMOTO KOJI)
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：10336795

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし